

ベトナムの生活を知ろう



まえがき

この「ベトナムの生活を知ろう」は、朝日カルチャーセンター名古屋の中級ベトナム教室に通うメンバーが、「ベトナムの山河（ノン・ヌウオック・ベトナム）」^(註1)の一部を翻訳したものです。

ベトナム語を勉強するに当たって、私達はベトナムの文化や習慣について書かれた日本語の資料が少なく苦勞しておりました。今回、本書のベトナムの文化・習慣についての章がきわめて参考になることがわかりました。私達は少しずつ本書を読みながらベトナムの文化の一端にふれることができ、一層ベトナムへの興味を強めました。また、たとえば祖先崇拜や長寿祝いなど、日本と同じような習慣があることがわかり、親近感も感じました。

この訳文は大変つたないものですが、ベトナムについての日本語の資料が少ない中で、より多くの方がベトナムを理解する一助になればと考え、印刷して配布させていただくことにしました。これを読まれた方にお願ひですが、文中に間違いや誤解に気がつかれましたら、

教えていただけますと幸いです。私たちは、これからもベトナムの文献を翻訳していくつもりです。どうかよろしくお願いいたします。

朝日カルチャーセンター名古屋 中級ベトナム語教室（講師 細井佐和子） 受講生一同

吉見有希乃 野呂美恵子 バック・スージー 尾崎由利子（受講開始年順）

註 1 Non nước Việt Nam
Tổng cục du lịch Việt
Nam,
Trung tâm công nghệ
thông tin du lịch
Hà Nội, 2004

目次

芸能……………1

一 チェオ……………2

二 トウオン……………5

三 カイルオン……………8

四 水上人形劇……………12

五 舞踏……………16

風俗習慣……………23

一 ランとフォン……………24

二 タインホアンを祭る……………28

三 祖先崇拜……………30

一〇	葬式	48
九	長寿の祝い	46
八	新築祝い	44
七	婚礼	40
六	きんま	38
五	収穫祭	36
四	親族	32



芸能



一 チェオ

古都ホアル（現在のニンビン省）^(註1)はチェオの故地とされている。チェオの創始者はファン・テイ・チャン（范氏珍）という女性で、一〇世紀デイン（丁）朝の宮廷内で歌と踊りの才能を認められた人だった。その後この歌と踊りが発展し北部へと広がり、その地域はゲティン省にまで及んだ。

かつてチェオはチユム^(註2)と呼ばれる男性を中心に形成されたフォン^(註3)（坊）によって村々を回って上演された。団員はおよそ一〇、一五人で構成され、重要な役割を果たす打楽器奏者を含め女優（ダオ）や男優（ケップ）、老人（ラオ）や老婆（ム）、道化（ヘー）^(註4)役がいた。チェオには決まった型があり、それは舞台の造りにも窺える。道具や幕はなく、布を垂らして演じる場所を仕切るだけだった。芝居は広げられた二枚のござの上で行われ、お客はそれを三方から取り囲むようにして見物する。興行は村の中心であるデイン^(註5)（亭）で行われ、幕開けには始まりの歌と共に太鼓が打ち鳴らされ役者が前口上を述べる。終幕には終

りの歌と共に再び太鼓が鳴らされた。

チェオは物語劇に分類され、観客が上演中に演者に掛け声をかけるなど両者は緊密な関係にある。役者が名前（役柄）を名乗るので、観客には話が分かりやすく親しみ易い。トウオン（註①）と同じく伝統劇であるチェオではチョンチャウ（註②）（歌に合わせて打つ太鼓）が特別な役割をしている。チョンチャウを扱う人はフォンの中でも中心的存在で、芝居の流れを仕切り役者の出来も判断する。

チェオは踊りや歌、音楽が滑稽な昔語と一体化したものである。使われている言葉は叙情的で民謡や諺が盛り込まれ、農民の知恵と屈託のない笑いに満ちている。筋立ては明快で生きる術や善行を説いている。古典的な作品は東方の伝統に従い「めでたし、めでたし」で終わる。多くの作品が民族の古い芸能の源となっている。

時代を超えて、チェオの太鼓の響きは、年齢や社会的地位に関係なく、どんな人をも惹きつける不思議な力を持っている。ベトナムのチェオは存続が危ぶまれるという苦しい時期も経験した。しかし、現在は民族的魅力に溢れた芸能として再認識されてきている。



註1 chèo

註2 trùm

同業者による組織で指導的立場の人

註3 phường 同業者による組織

註4 đào 女優 kếp 男優 lão 老人

mụ 老婆 hè 道化

註5 đình 昔の村の公共の建物。村の守護神
を奉ったり、集会場として使われた

註6 tuồng ベトナムの古典芸能の一つ
詳細後述

註7 trống chầu

(吉見)

二 トウオン

トウオン^(註1) (ハットボーイまたはハットボとも言う)^(註2) は、独特の性質を持っているベトナムの古典劇である。トウオンのせりふは、^(註3) チュノム文学と漢語の文学が絶妙に融合している。

トウオンは、一三世紀のベトナムのチャン(陳)朝の時代に、捕虜となった中国の元の軍隊の兵士が演じた歌劇の影響を受けているが、独自性がある。

始め、トウオンはベトナムの北部のみで上演されていた。その後、グエン(阮)氏の軍隊が中南部に入って伝え、そこで極めて盛んになった。そして一七世紀から一八世紀にかけて最盛期を迎えた。グエン(阮)朝(一九世紀)時代には、トウオンは王朝の文化生活の中でも、また民衆の中においても重要な位置を占めていた。

トウオンには、トウオンタイ(模範・手本)、トウオング(皇帝が見るもの)、トウオンクンデイン(宮廷で演じるもの)、トウオンフオ(何夜にも渡って上演されるもの)、トウオンド(史実ではなく創作したもの)、トウオンタントイ(小説を脚色したもの)^(註4)がある。

これらは二つの種類、古典トゥオンと大衆トゥオンに分けることができる。今日、トゥオンには北部、南部、中部の三つの流派がある。中部のトゥオンは最も民族色豊かである。ビンディン省はトゥオンの揺籃(註5)の地で、後にダオ・タンやグエン・ヒエン(註6)・ジンなどの名士たちによって、トゥオンの土地となった。

トゥオンは、高度な形式を持ち、また、話し方、歌い方、そして演技に多くの厳格な約束事がある。空間と時間は、わずかな持ち物とせりふ、歌、所作、踊りによって構成される。それらによって、観客は山や河の場所を知り、早朝、午後、夕暮れの時間がわかる。戦場、馬、船に乗ることを想像できる。古典トゥオンには、舞台装置や幕さえもない。役者は様々な色の隈取りを行い、それによって役柄がわかる。赤い顔のひげが長い役はチュン(註7)（忠臣）、しま模様でひげが短い悪役はニン(註8)（奸臣かんしん）だ。男優はケップと呼ばれ、官吏や村人などがいる。老人の役には、老いた文人、武人、きこりや漁師も登場する。女優はダオと呼ばれ、烈女や遊女が登場する。

ベトナムの古典トゥオンの戯曲は数百に達したが、時間がたつにつれ現代ではほとんど失われた。代表的作品には「ソンハウ」、^(註9)「タムヌドブオン」、^(註9)「ダオファイフオン」、^(註9)「チュンヌブウン」などがある。トゥオンは伝統的な舞台芸術の貴重な資産であり、今後も民族文化の宝である。



(尾崎)

註 1 tuồng

註 2 hát bội, hát bộ

註 3 chữ Nôm

漢字を元に作られたベトナム固有の文字

例：



字というチュノム

字の発音は trử、字は意味を示す

註 4 tuồng thầy

tuồng ngự

tuồng cung đình

tuồng pho

tuồng đồ

tuồng tân thời

註 5 Bình Định ベトナム中部

註 6 Đào Tấn (1845-1907)

トゥオンの編集などを行う

Nguyễn Hiền Dĩnh (1853-1926)

トゥオンの創作などを行う

註 7 trung

註 8 nịnh

註 9 Sơn Hậu

Tam nữ đồ vương

Đào Phi Phụng

Trung nữ vương

三 カイルオン

カイルオン^(註1)は、二〇世紀の初めに誕生した歌劇である。カイルオンの源は、ベトナム南部^(註2)にあったリーという調子の曲や、ニヤックタイトウ^(註3)という自由な形式の歌楽がもとになっっている。室内での歌楽から、歌いつつ歌の意味を表す動きを演じる表現形式カラボ^(註4)へと発展していった。カラボは、室内での歌楽と、今日のカイルオンという歌劇とを結び架け橋といえる。カイルオンは誕生してすぐ、南部の人々に大変親しみを持たれた。南部方言でカイルオンを歌うと、とても味わい深いものになるからである。そうして次第にカイルオンは国中に広まっていった。

その他の民族歌劇と同様に、カイルオンも踊り、歌、音楽で構成されている（カイルオンには笑劇はない）。カイルオンの音楽は、トウオンやチェオのように打楽器を使うことなく、ギターとダングエツト^(註5)（月琴）が二つの主要な楽器である。

成立して日が浅いカイルオンだが、急速に豊富な演目が作られた。たくさんの脚本が劇

作家たちによって次々と生み出され、大衆に受け入れられた。代表作には「ルクバン
テイエン」^(註6)というチュノム文学の傑作や、「リウ・ビンとズオン・レエ」^(註7)などがある。歴史
や社会変化を題材にした作品や、神仙ものやロマン小説を脚色したもの、当時の荒唐無稽
な話もある。

カイルオンは、都市の大衆の好みを反映し発展してきた。成立して日が浅いにもかかわ
らず、カイルオンはすばらしい生命力をもち、先に成立したチェオとトゥオンをおびやか
す勢いである。進化、発展していく過程で、カイルオンは音楽の改良を重ね大衆に愛され
る舞台の一つとなっている。



(野呂)



註 1 **cải lương** 改良

註 2 **lý**

註 3 **nhạc tài tử** 樂才子

註 4 **ca ra bộ**

註 5 **đàn nguyệt**

註 6 **Lục Vân Tiên** (陸雲仙)

19世紀のチュノム韻文物語

註 7 **Lưu Bình-Dương Lễ**

二人の幼なじみの友情の物語

四 水上人形劇

人形劇は世界のほとんどの民族に存在するが、水上人形劇(註¹)ともなると、それは恐らくベトナム独自のものである。水上人形劇は、リー(李)朝時代(1009〜1225)に形成され、その痕跡はベトナム全土に残っている。例えば、トウイデインという建物(ハ―タイ省タイ寺ロンチー)(註²)があり、また「三つの山をいただいた黄金の亀が一匹燦然と輝く湖面に浮かんできた」とか「角の生えた鳥が群れをなす」と記された碑文もある。

以前は水上人形劇に携わる人たちはフォンという組織を形成していた。各フォンは団員が七、八〇人程からなり、チュムが一人で興行を仕切っていた。実際に人形を操ったのは二〇人ほどで、残りは裏方に徹した。フォンは水上人形劇に携わる素人の集団であり、日常生活における互助組織でもあった。毎年彼らは祖先崇拜の儀式を行い、新たに人を加入させた。加入者はキンマ、酒を祖先に捧げ、フォンの秘伝、奥義、即ち人形の作り方、動かし方などの門外不出を誓った。通常女性は、結婚によって秘伝が漏洩するのを回避する

為に加入させなかった。

水上人形劇の登場人物は、実に多種多様である。それらは農民が彫った作品で、容姿も性格づけも相異なるものとなっている。人形の本体は木から作られ、表面には、防水のため、漆が塗られている。最も親しまれている登場人物は、「チューテウ」^(註3)といい、丸々とした体型とやんちゃな微笑を湛えているのが特徴である。

ベトナム北部のデルタは、水上人形劇に適した沼沢地に恵まれている。デインの集会や祭礼の時に見物人は舞台のある池や湖のぐるりを囲み、演目を観覧した。舞台の幕開けは、チューテウが挨拶に出て来るところから始まる。悪戯好きな顔立ち、突飛ないでたち、あれやこれや身振り手振りを交えながら、「はじまり」という前口上で観衆の笑いを誘う。人形遣いは演目中は水にずっと浸かり、竿や糸を操って、人形を動かす。演目の音楽は太鼓、木魚、銅鑼などの打楽器が中心となる。



水上人形劇は豊かな演目をもつ。しかも観衆の要望や時代の生活様式にあった内容の新しい演題が、日々加えられている。水上人形劇は、ベトナム中で親しまれている伝統的な民族芸能で、今日では世界中で紹介されるまでになっている。



(バックステージ)



註1 **múa rối nước** ムアズイヌウォック

註2 **Hà Tây** (ハタイ) 省 **Chùa Thầy** (タイ寺) にある **Thủy Đình** とその池 **Long Trì** (竜池) では、現在も祭礼で水上人形劇が行われる

註3 **chú tễu**

五 舞踊

人類が誕生した時から踊りというものは、文化の一つとして欠くことが出来ないものである。舞踊は民族の歴史が發展する中で生まれ發達し、ベトナムの自然環境やベトナム人共同体の労働、文化、社会と固く結びついている。

遙か昔、踊りは狩猟や農耕など人間の生産活動を表す動作と密接な関係があった。そのため、この時代の踊りはそれらの労働を再現したものであり、石投げや弓引き、種まきなどの動作があった。一日の仕事の後、人々は火の周りに集まって歌を歌いはやし声を上げ、手拍子足拍子を打ち、それに石や竹を打ち鳴らす音も加わり踊りだす人も現れた。これらが舞踊が芽生える下地となった。ベトナムの銅鼓(註¹)には踊る人の姿がはつきりと描かれている。

ベトナム人社会の發展が創造力を促進し、踊りは日ごとに洗練され人々の思想や心情を表現する芸術の一つとなった。

社会の状況や風俗習慣、信仰が変化していく中で、ベトナム舞踊も新しい形を生み出し変化していった。また、舞踊は民族や地方の文化の特徴を表現するという面も併せ持っている。タイグエン^(註2)（中部高原）地域の民族舞踊は、素朴でゆったりとした中に田舎の賑やかな雰囲気を持っている。タイバック^(註3)（ラオス国境）地域は軽快で繊細な印象、ビエットバック^(註4)（中国国境）地域は賑やかで陽気、平野部地域のベト族の踊りはゆったりとして、たおやかで面白おかしいところがある。

ベトナムの伝統舞踊は四つに分類できる。それは民間舞踊（ムアザンザン^(註5)）、信仰舞踊（ムアテイングオン^(註6)）、宮中舞踊（ムアクンデイン^(註7)）、宗教舞踊（ムアトンザウ^(註8)）である。

民間舞踊（ムアザンザン）

民間舞踊は、ベトナムの各民族共同体に広くみられる踊りである。民衆により創り出され、世代を経て伝えられてきた。この踊りは各共同体の文化生活の中で広く踊られてきており、それぞれの民族性を表すとともに、他の舞踊の形式に発展していくための基礎とな

っている。

各民族には特徴的な踊りがある。ベト族には竜の踊りや太鼓、カスタネット、木魚や獅子を使った踊りがあり、ムオン族(註9)には竹や杵、銅鼓を使った踊りがある。他にもタイ族(註1)、タイ族(註1)、クメール族(註12)、チャム族(註13)、エデ族(註14)、バナ族など各民族が独特の道具を使った個性的な踊りを持っている。

信仰舞踊（ムアティングオン）

信仰舞踊はベトナム各民族の儀礼や信仰、風俗習慣と密接な関係がある。専門家は民間の宗教舞踊(註16)とも呼んでおり、それは人々の信仰生活の心の動きを反映したものであるからである。

各民族にはそれぞれ独自の信仰の踊りがある。ベト族のハウドン(註17)、タイ族のキムプアンテン(註18)、タイ族のテン(註19)、クメール族のクンチャン(註20)、チヨロ族のヤンバタンルア(註22)、ザオ族のカップサクなどである。信仰舞踊はほとんど巫女や口寄せ、霊媒師など一般に

祈祷師と呼ばれる人によって踊られる。

宮中舞踊（ムアクンティン）

ベトナムの宮中舞踊はベト族とチャム族にだけあり、その舞踊は王朝の成立と発展の中でみられ、王朝の統治階級の人々を楽しませる娯楽としての踊りだった。はつきりとした型があり専門の踊り手によって踊られた。例えばチャム族ならチャキエウ（註24）の舞姫の踊りや宮中歌舞、ベト族には聖獣を表す踊り（竜、亀、麒麟、鳳凰）、六つの供物を捧げる踊り、長寿の祝いの踊りなどである。

グエン朝の時代、舞踊は王朝での歓迎式や葬式、皇子や皇女の結婚式の場で披露された。

宗教舞踊（ムアトンザウ）

宗教舞踊は宗教が発達する中で生まれた舞踊である。ベトナムには三つの代表的な宗教があり、それは仏教とカトリック教、バラモン教である。宗教舞踊は数が少ないが独特の

様式が決まっている。仏教では香や花を捧げる踊り、カトリック教では太鼓を使った踊り、バラモン教ではシバの踊りなどがある。

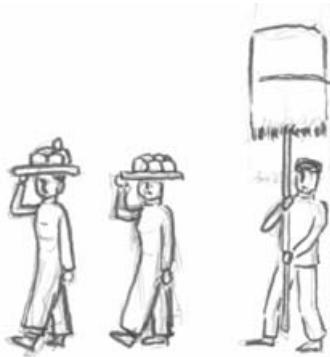
(註25)



(吉見)



- 註1 **trống đồng** 銅鼓
楽器だが重要な儀礼の用具でもある
- 註2 **Tây Nguyên** タイグエン地域
- 註3 **Tây Bắc** タイバック地域
- 註4 **Việt Bắc** ビエットバック地域
- 註5 **múa dân gian** 民間舞踊
- 註6 **múa tín ngưỡng** 信仰舞踊
- 註7 **múa cung đình** 宮中舞踊
- 註8 **múa tôn giáo** 宗教舞踊
- 註9 **Mường** ムオン
múa sạp 竹の踊り
múa chàm đuống 米をつく踊り
múa chàm thau 銅鼓を使った踊り
- 註10 **Tày** タイ
- 註11 **Thái** ターイ
- 註12 **Khmer** クメール
- 註13 **Chăm** チャム
- 註14 **Ê Đê** エデ
- 註15 **Ba Na** バナ

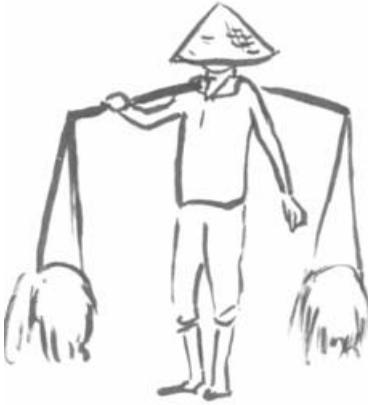


- 註 16 **múa tín ngưỡng dân gian** 民間の信仰舞踊
- 註 17 **hầu đồng** ハウドン
đồng は口寄せする人の意味
以下各民族の巫女・呪術師を示す
- 註 18 **Kim Pang Then** キムパンテン
- 註 19 **Then** テン
- 註 20 **Cúng trăng** クンチャン
- 註 21 **Choro** チョロ
- 註 22 **Yang va-thần Lúa** ヤンバタンルア
- 註 23 **Dao** ザオ族の **Cáp Sác**
- 註 24 **Trà Kiệu** チャキエウ (チャンパの都)
クアンナム (Quảng Nam) 省にある
- 註 25 **múa chạy đàn** (チャイダンの踊り)
庭にある祭壇の周囲を経を唱えながら踊る
múa dâng hoa (ザンホアの踊り)
花を捧げるの意がある



風俗習慣

ベトナムは、五四の民族より成り立つ多民族国家で、各民族はそれぞれ独自の風俗習慣をもち、ベトナム文化を多彩で豊かなものとしている。本稿では専らベトナム最大の民族であるベト族（キン族）^{（註1）}の一般的な習俗を概観するにとどめる。



註1 Việt（越）族、
Kinh（京）族とも称す

一 ランとフォン

ベトナムの文化は農耕文明を土台にして成立している。ベトナム人の生活は農村地帯のソム、^(註1)ランと呼ばれる集落単位と密接に繋がっている。ランは、ベトナム国内の各民族の言語で様々な呼び名がある。ベト族ではケ、^(註2)あるいはチャ、タイ族(ターイ族)ではチエン、^(註4)ムオン族ではバン、^(註5)タイグエン地方の少数民族ではブオン、^(註6)プライといった具合である。

ベトナムの農村部のランは多様で、地勢に基づくなら、北部では沿海のラン、島嶼のラン、盆地のラン、田園のラン、堤のラン、南部では埋立地のラン、メコン川の二大支流であるティエン川、ハウ川近辺における中洲のラン、氾濫原のランというように分類でき、業種別に基づけば、農業のラン、手工業のラン、半農半工のラン、半農半商のラン、漁業のラン、鍛冶屋のラン、陶器のランと分類できる。ベトナムでは、ランもフォンも社会的に固く密着した組織である。ランにもフォンにも固有の掟があり、それら共同体ごとに生きる人々は常に自らのティンホアン^(註8)に祈り、供物を捧げた。彼らは血縁、地域、職業ごと

に固く結びついていたので、それぞれのランの習俗、儀礼は独自の変化を遂げ、多彩を極めることとなった。

ベトナム人の記憶には、決して色あせることなく、ガジュマル、井戸、デイン、川と渡し場、田園を羽ばたくサギ、垣根の小さなトビ、デインの広場の縁日、翩翻と翻る旗、騒々しい太鼓や鉦、がある。これらは、たとい異郷の地に暮らそうともベトナム人にとって神聖でなつかしい思い出である。



(バックスージー)



- 註1 xóm、làng 村。地域社会の行政単位
- 註2 kẻ
- 註3 chạ
- 註4 chiềng
- 註5 bản
- 註6 buôn
- 註7 play
- 註8 **Thành Hoàng** (城隍) 元来は、中国の神話上の人物で、都市 (=城) と堀 (=隍) を守護する土地神。後に道教の陰陽思想と融合し、冥界の裁判官とも考えられるようになる。ベトナムに伝播するに際して、次項「タインホアンを祭る」で述べるように変遷していった。

二 タインホアンを祭る

ベトナム人には「水を飲んだら、その源に思いを致す^(註1)」という考えがある。ほとんどのランやフォンでは神社を立て、それぞれの共同体ごとのタインホアンを祭っている。タインホアンとは、民衆や国家のために功をなした人物で、外敵を退けたり、ランやアプを築いたり、職業を生み出して、村人に尊敬されている。各王朝の下にあつては、タインホアンは国家のために功があつたとして、爵位勲等を与えられた。ベトナム人は故郷を離れても行く先々で、神社を立て、自身のタインホアンを祭ってきたのである。

毎年タインホアンの祭りは村や街の最も盛大な祭日である。この日はご馳走を作る以外にも、タインホアンの故事にちなんだ劇を上演したり、御輿を担いだり、各種の遊び、たとえば武闘会、闘鶏、舟漕ぎ、シーソー、人間将棋、綱引き、歌劇、水上人形劇などを楽しんでりする。その盛大な雰囲気は昼夜を分かつたず、数日にも及んだりすることもある。そしてこの日は、老若男女を問わず一様に楽しみにしているのが、特に年頃の男女は知り

合う好機であるから、最も待ち望んだ。

タインホアンの祭りには、人々は人民国家の為に犠牲になった英雄烈士も同時に偲ぶ。彼らは民衆の尊敬を集め、その名を記念碑に永遠に刻まれるのである。

(ボックスージー)



- | | |
|-----|---|
| 註 1 | uống nước-nhớ nguồn |
| 註 2 | đình, đền, miếu 等という |
| 註 3 | 前項「ランとフォン」(註 8) 参照 |
| 註 4 | áp (邑) 村。前項「ランとフォン」(註 1) の xóm に比べ、開拓による発生の意味合いが強い。 |

三 祖先崇拜

ベトナム人の一般的な信仰は、祖先崇拜である。全国津々浦々どの家庭にも祖先を祭る祭壇が、一番立派な場所に設置されている。ベトナム人は、たとい死んでも死者の魂は常に残された家族を見守っていると考えている。このように生者と死者は固い絆で結ばれており、生者はいついかなるときも死者を忘れることはできない。

大晦日から新年の変わり目に各家庭では、あの世の人をテトの祝いに招く為にテイエン(註1)トウオンを行う。年末には、人々は墓掃除に行く。これは先祖代々の墓を祭る儀礼であり、生者がこの世で新年を迎えるために家屋を修繕するように、死者もきちんとしなければならぬ。また先祖の命日には家族が集まって、ごちそうを作って死者に供え、合わせて、子孫に健康と幸福をもたらすようにと祈願する。

今日でも祖先崇拝の習慣は残されつづけられている。民族によってその形式は異なっているとはいえ、「水を飲んだら、その源に思いを致す」という考えはやはり根強く、人々は父祖の恩を忘れることはない。



註1 **tiên thờ ư ơ ơ** (先常)
正式の祭礼の前の儀式

(ボックススーヅー)

四 親族

すべての人は誕生すると名前をもつ。ベトナムの名前は主に二つの部分からなる。一つは一族をあらわす姓で、グエン（阮）、レ（黎）、チャン（陳）、フアム（范）^(註1)などがある。父系制では、子どもは父の一族の姓をもつ。母系制では、母の姓をもつ。もう一つは個人をあらわす名で、チュン（忠）、ズン（勇）、クック（菊）、マイ（梅）^(註2)などがある。姓と名の間にある名前は、^(註3)デムと呼ぶ。多くの女性のデムはテイ^(註4)という言葉で、デムは一つか二、三つの言葉で表される。デム名をもっていない人もいる。

現在でも、一族を維持することは重要な問題である。ゾンホもしくはゾントオク^(註5)は同じ祖先をもつ人の共同体であり、同じ姓をもつ。その、首長としてチュオンホもしくはトック^(註6)チュオンがいる。チュオンホには、一族の中の第一番目のチ（チーチュオン^(註7)という）の長男がなる。チュオンホは父から息子に世襲される。もし家に男子が生まれない場合（子どもがないか、女の子しかない場合）でもチュオンホはチーチュオンの一門の中で伝えら

れる。

チュオンホには次の責任がある。祠（祠がある場合）の維持管理、一族の重要な出来事である、葬式、結婚式、家の建築、墓参り、墓を建てること、毎年の一族の法事・祭礼を仕切らなければならない。一族をまとめるために、チュオンホは威厳があるだけでなく、博識で徳があり手本になる人でないと務まらない。一方、チュオンホであることの利益は、一族の香火（一族の財産）を継承できることだ。

かつては、一族の発展は男性数が多いか少ないかで決まると考えられた。村で祝いの祭礼があった時、あるいは賦役や納税の分担など、村内での役職はすべて家庭のデイン（丁成年男子）の数を基にしていた。一家がたくさんの義務をこなせば、それだけの見返りも得られた。どの家族も男子をたくさん産んで幸せになることを願った。男子が産まれないのは祖先に申し訳ないとされた。家族にも社会にも、「女子は一族ではない」という認識（註80）があった。

今日では男尊女卑の考え方は変わりつつある。夫婦の子ども数は徐々に減少しており、

平均二人となっている。そのため生まれた子どもが男の子でも女の子であっても喜ばれるのである。

しかし、ベト族のほとんどの人にとって、一族の中のチュオンホという役割は変わっていないし、父から息子に伝わっている。しかし、男性だけが親族の行事を行うのではなく、女性（娘や嫁）が行事に参加する新しい動きもある。それぞれのゾンホの「民主化」の流れは以前と比べて進んでいる。一族が集まることは、自分達のゾンホがよき伝統を発揮し、一族の独自の務めを一族全ての人々で行う機会なのである。

（尾崎）



註 1 Nguyễn, Lê, Trần, Phạm

註 2 Trung, Dũng, Cúc, Mai

註 3 đệm 姓と名の間の名前

註 4 thị

註 5 dòng họ, dòng tộc
祖先を同じくする血縁集団

註 6 trưởng họ (tộc trưởng)
ゾントオクの長

註 7 chi trưởng
ゾンホの中でチュオンホを出す家族。
chi はゾンホの内部で分かれた人、家

註 8 nữ nhi ngoại tộc
女子は族外

五 収穫祭

ベトナムに住む五四の民族には、どこでもムンドウオックムア(註1)(収穫祭)の風習がある。

これは豊作を祝い、天地、自然への感謝をあらわす祭りである。この祭礼はそれぞれの民族の農業の時期や習慣にしたがい、それぞれの場所で、一年のうちのいい時期を選んで行われる。

タイグエンやビエトバックそしてタイバックでは、段々畑や焼き畑で収穫の後に収穫祭が行われる。陸稲やトウモロコシを収穫すると必ず食事が屋内である。祭礼が村や部落の家を順にまわって行われる所もある。一ヶ月もの長い間に渡る場合もある。

江河やメコン川のデルタ地帯で、ベト族の住む地方では収穫祭はテトコムモイ(註2)(新米の節句と呼ばれ、旧暦一〇月一〇日に行われる。人々は新米を炊いて、祖先と天地に捧げる。

都市においても、各フォンゲー(同業集団)やフォーゲー(同業の地区)で、職業の祖に感謝し天地に感謝する、ムンドウオックムアによく似た祭りを行う。

収穫を祝い、豊作を望むのは、次の時期も穏やかな天候であることを祈ることである。
この風俗・習慣は昔から現在まで続いている。



註1 *mùng được mùa* 収穫祭

註2 *tết cơm mới* 新米の収穫祭

(尾崎)

六 きんま

きんま(註1)を噛む習慣は、フン王(註2)の時代からあり「きんまの葉とびんろう樹(註3)の話」という有名な昔話と密接な関係がある。きんまは、びんろう樹の実(甘味)、きんまの葉(辛味)、木の根(苦味)、石灰(刺激)の四種類の材料からなる。古い本の記述によると「きんまを噛むと口の中がすっきりとして気持ちいを静め、消化を助ける」とある。

きんまを口にすることで人々は親しくなり、お互い心を開くことが出来る。そのためお客は家に招かれるときんまを勧められる。結婚式の宴席では喜びを分かち合うために、きんまの皿が用意される。祭りやテトの時は、初めて会う者同士はすぐに親しくなり、すでに知っている者同士であれば更に親密度が増す。きんまを噛めば寒い風邪の吹く日でも体を暖めることが出来る。家に不幸があった時は、悲しみを静めて和らげてくれ、親族や友

人、隣人がその辛さを共感し分け合ってくれる。この習慣は子孫が祖先を心から敬う気持ちも表している。そのためベトナム族が祖先を礼拝する時は大皿に盛ったご馳走と共にきんまも供えられる。

(註4)

きんまだけでなくトウオックラオという名の刻みタバコもベトナムの習慣である。昔、多くの女性はきんまを噛み、話のきっかけを作った。一方男性には楽しい時、悲しい時もタバコが切っても切れないものである。トウオックラオといえはラオス産を考える人もいるが、この葉の種類はベトナムだけにある。とても古い諺にも「タバコを思い出すように誰かを思い出す。キセルは埋めてもまたすぐに掘り出したくなる」とある。ベトナムでは殆どどの民族の人もタバコを吸う。

一般の人々はたいいてい刻みタバコを吸う時は陶の器を使う。豊かな人々は金属のキセルを使う。農作業など家から離れた時には、持ち運びに便利なように竹筒のキセルを使う。きんまとタバコ道具と茶道具は昔のベトナム人が客をもてなすのに必ず必要なものだった。

『青いきんま、白いびんろう樹の実、紅いチャイの木の根、
石灰は義理と混ざり、タバコは人と人との縁を深める』 民謡



- | | | |
|----|------------|---------------------|
| 註1 | trầu | きんま |
| 註2 | Hùng Vương | 雄王
ベトナム原初の王 |
| 註3 | cau | びんろう樹 |
| 註4 | thuốc lào | トゥオックラオ
刻みタバコの種類 |

(吉見)

七 婚礼

昔ベトナムの農民は、「家の新築、結婚、水牛の購入」^(註1)を人生の三大事と考えていた。それ故結婚式は重大事で、晴れて夫婦になるまでには、種種の煩瑣^{はんさ}な手続きを経なければならなかった。

最初に行うのが、訪問式^(註2)である。これは男性側の家が女性側の家に贈り物をして、二人の交際を許してもらうもの（両家は婚約した）であった。次に行くのが、結納式^(註3)である。これは男性側から女性側に果物を送るものである。そして結婚式^(註4)。これは吉日・時間を選び、男性の側が女性の家にまで花嫁を迎えに行く。更に後日、夫婦は揃って、妻の実家に里帰り^(註5)して、先祖に報告することになる。

昔の結婚は複雑で、また随分費用がかかった。結婚式は、両家は近隣に住んでいることもあって、常に徒歩で行ったが、その先頭は一族の長老が歩き、彼は縁結びの神である月下老人^(註6)へ捧げるため、または厄除けの意を込めて、両手に焚いた香を持った。それに引き続くのは腰に帯を巻いた一団で、彼らはビンロウジや菓子のお盆を頭に載せ、豚、米、酒

を運ぶ役を担った。花婿は近親者や付き添い人と一緒に歩いた。花嫁の家に着くと、花嫁側の婚礼の長は、花婿が式に列席する前に祖先に祈祷を捧げる。花婿は花嫁の祖先、両親に礼拝しなければならぬ。その時花婿は花嫁の両親からお金や装飾品を贈られる。両者の付添い人が受け取るのを助ける。こうして花嫁の実家での式を終えてから、花婿の家はようやく花嫁を迎えて帰る。

ここ数十年來、結婚式までの過程も、交際^(註7)、婚約式^(註8)、婚姻届^(註9)、挙式の四段階へと変わっていく。各々の段階も生活様式の近代化に伴い、簡略化への方向に進みつつある。

しかしそうではあっても、宴会はかなり盛大に行われ、さながら祭日の様相を呈する。新郎新婦の両家は、結婚の通知書を友人知人親戚縁者に送り、自分たちの若い新郎新婦を祝福してもらうために宴に招くこともある。新夫婦は招待客の前で終生変わらぬ愛を誓うのである。

本稿ではベトナム族の婚礼の概略を記述するのみにとどめるが、ベトナム国内の他の民族にはそれぞれ独自の婚礼の様式がある。



註 1 làm nhà, cưới vợ, tậu trâu

註 2 lễ dạm hỏi

註 3 lễ sêu

註 4 lễ thành hôn (cưới)

註 5 lễ lại mặt

註 6 Nguyệt Lão (月老)

註 7 tìm hiểu

註 8 ăn hỏi

娘の家に結婚の許しを求めに行くこと

註 9 đăng ký kết hôn (結婚登記)

(バックスージー)

八 新築祝い

昔、ベトナムの農民にとって家を建てるということは、人生の中の三大事業のうちの一つであった。「安居樂業(註1)(満ち足りた生活)」は、心が休まる場所を持つてこそ、しっかりと仕事が出来るという意味である。その概念は、今でもベトナム人の心に根付いている。そのため誰でもが家や土地、財産を得るために奮闘する。多くの人が晩年になってやっと家を建てることができ、自分は余命いくばくもないけれども、子供や孫に家を残す。死ぬ時になっても自分の家を持たないと、とても辛く感じる。

そのため、ベトナム人の大事な習慣として新居を祝うということがある。主人は新しい家を建てたとき(修理をしたり、家の内装を改めたり、もしくは新しい場所に引っ越すだけの時でさえ)祖先に新築祝いの儀式をする。その日は村の人々や友人、親戚が招かれ酒を飲み、家の主人のために喜び合い、健康や幸福、一家の繁栄を願う。この習慣は、今でもベトナム人の間に広く残っている。



註 1 安居樂業
an cư mới lạc nghiệp

(吉見)

九 長寿の祝い

「敬老得寿」^(註1) ベトナムには高齢者を敬うという美風がある。それ故、歳を重ねることは家族、一族郎党、地域共同体の尊敬を得ることになる。

昔は四〇歳に達すれば、長老^(註2)として敬われたものである。ベトナムの歴史を繙いてみて、も、チャン朝（1225〜1400）時代、チャン王は四〇歳にして玉座を息子に譲り、一切の国務から退き、出家したと伝えられている。

ラン（村）では、五〇歳になればラオ（長老）の儀式が行われた。たといランの有力者でなくとも、長老は祭りにはディンに行き、赤い縁取りのあるござの上で宴席に着いた。この敬老の精神は今にも受け継がれ、より意義深いものとなっている。

今日でも親・祖父母が七〇歳、八〇歳、九〇歳になれば、子や孫たちは常に長寿を祝う。大抵は誕生日やテト（旧正月）に行い、この祝い事は子供たちの親に対する孝の気持ちを示す機会であり、お祝いの規模が大きかろうが、小さかろうが、この日がめでたい日であ

ることを表すことが肝要なのである。また各村や各フオンでも長寿を祝い、お年寄りはこのでも敬われる。七〇、八〇歳になれば、ランの人たちが長寿を祝いに来たり、写真を撮ったり、記念品を贈ったりする。こうした機会はお年寄りに対する共同体の若い世代の暖かな気持ちを知らしめ、彼らが共同体と深く結びついていると感じさせるのである。

ホー・チ・ミン主席は、生前、全国の百歳以上の全てのお年寄りに絹の服を進呈し、彼らの長寿を祝った。



註1 kính lão
 đắc thọ

註2 lão ông

(バックスージー)

一〇 葬式

ベトナム人は「死ねばすべて終わり(註1)(死なば仏)」と考えているので、人が亡くなると葬式(註2)は厳粛に執り行われる。かつて葬式は以下のように行われた。亡くなった人の体は清められ、よい服を着せられ、上あごと下あごの間に一本の箸をかませる。そして口の中にはひとつかみの米と小銭を含ませる。これをガンハム(註3)という。その後、亡くなった人の体を地面に置く。これは「土から生まれ、土に帰る」という考えをあらわしている。続いてカムリエム(註4)(死者を布で固くつつむ)と納棺(註5)が行われる。

納棺の次はティンフック(註6)(喪服を着ること)で、ここから正式な喪となる。息子・娘そして亡くなった人の嫁は、粗布のはちまきを巻き、バナナの葉あるいは藁わらでできたかぶり物)をかぶり、粗布の服を着る。親族・親戚の人々は葬儀のためにはちまきをする。遺体が安置されている間、朝晩午後に食事が供えられる。村の人々が弔いに来て、哀悼の意を示す。楽団が来て悲しい音楽を奏でる。その後、適した日を選んでドウタン(註7)(野辺送り)

が行われる。葬送の列には幟のぼりや祭壇、紙でできた家（棺桶の上に置く）がある。野辺送りをする人は棺桶の後ろを歩き、沿道では紙製の金キンをまく。墓地では遺体を墓穴に下ろし、埋めて土を盛る。その後、家に帰って祭礼を行う。三日後に喪主はビエンモ（註8）（墓参り）を行う。四九日後に、チュンタットの礼（註9）を行い、食事を供えるのをやめる。一〇〇日後には泣くことを終わりにするという意味のトットコック（註10）（トイコック）がある。一年後にはゾーダウ（註11）（一周忌）の式、三年後（または二年後）には喪明けの意味のヘットタン（註12）がある。今までは葬儀はもっと簡略化して行われる。カムリエム（註13）（遺体を布で覆う）、入棺、ビエン（註14）（弔問）、ドクアタン、ハヒユエット（註14）そしてビエンモ（墓参り）である。亡くなった人の家族は白いはちまきを巻くか、黒い喪章をつける。

（尾崎）

- 註 1 nghĩa tử là nghĩa tận
死んだ人にかつてどのような怒りや恨みなどを持っていても、それは捨てて弔う気持ちになるべきである
- 註 2 tang lễ 葬式
- 註 3 ngậm hàm
- 註 4 khâm liệm 布で覆うこと
本来は死者にきょうかたびら経帷子を着せることを示した
- 註 5 nhập quan
- 註 6 thành phục
- 註 7 đưa tang
- 註 8 viếng mộ
- 註 9 chung thất
- 註 10 tốt khóc (thôi khóc)
- 註 11 giỗ đầu
- 註 12 hét tang
- 註 13 viếng
- 註 14 hạ huyệt

二〇〇九年一月

朝日カルチャーセンター名古屋 中級ベトナム語講座クラス受講生一同

イラスト 野呂美恵子